

データが語る “いま”

本川 裕



第21回

日本の夫婦は なかよし？

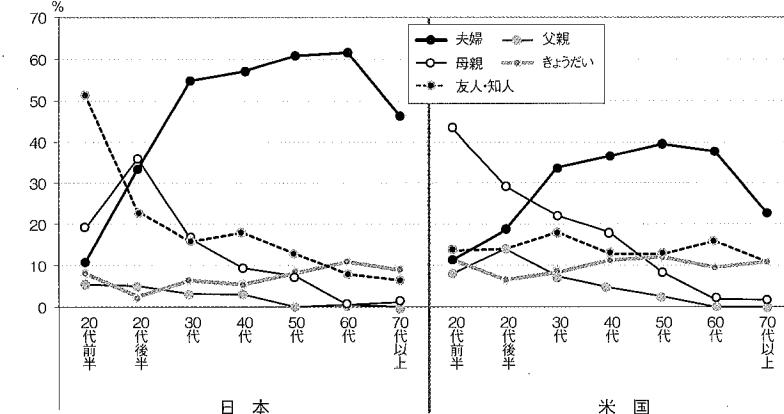
悩み事や相談事を、まず、誰と相談しているかという国際比較意識調査の最新結果が公表されたので、これを見てみよう。

日本の年齢別結果では、20代前半では「友人・知人」が最も多く、20代後半では「母親」が最多である。しかし、結婚している人が多くなる30代以降は「夫婦」が50～60%と最も多くなる。70歳以上では、「夫婦」という回答は少なくなるが、これは死別した人が増えるためであろうか。「父親」と相談する人は全年齢で少なく、よくいわれる「父親不在」を示している。

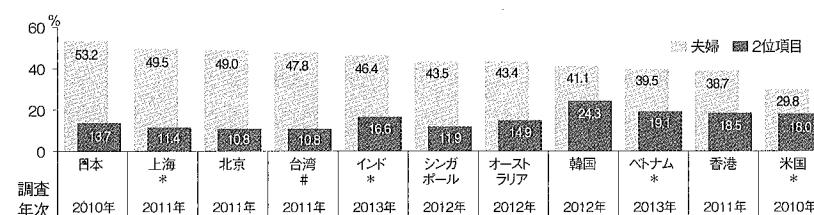
米国の年齢別結果では、両親、とくに「母親」の比率が全体に高いのを除くとほぼ日本と同じパターンであるが、「夫婦」という回答率は高くても40%程度と日本よりずっと低い。米国というと常に「愛しているよ」と言い合う夫婦を思い浮かべるが、実際は、そんなに仲がいいわけでもなさそうだ。

実は、国際比較の対象となったアジア・太平洋の11カ国・地域の中で、日本の「夫婦」の回答率は最も高く、日本ほど夫婦がよく相談し合う国はないのである。これを、日本人の夫婦ほど仲がよい夫婦はいないととらえるのか、それとも、一般に日本では社会の絆が希薄になっていて、夫婦以外に相談すべき相手が少ない

図 日本の夫婦はなかよし？
■悩みごとや重大な相談事を、まざとあなたに相談していますか、あるいは、すると思いますか（択一回答）



■「夫婦」の割合と2位項目の内容（2位項目→無印：「友人・知人」、*:「母親」、#:「きょうだい」）



(注) 夫婦には事実婚の相手を含む。選択肢には図に掲げた以外に、その他の家族、親戚（子どもなど）や匿名相談相手などがある。

(資料) 統計教理研究所「アジア・太平洋価値観国際比較調査」

とらえるのかは、見方しだいだろう。

夫婦の間が緊密なのは日本特有の「家」制度に源を有するという考え方もある。

社会人類学者の中根千枝氏によれば、『家』という制度があったために、日本人のあいだには、親の家を頻繁に訪ねるという習慣が発達しませんでした。したがって、別居してしまうと関係が疎遠になります。中略 親のほうも、一緒に住んでいる娘（あるいは息子）には遠慮がなくとも、別居している息子・娘たちに対しては遠慮するというのがつねです（『家族を中心とした人間関係』講談社学術文庫 1977年 p.138～139）

夫婦関係が非常に緊密なのも、夫婦が「家」の外に位置づけられる兄弟や

近所に頼りにくくこともあって「家」を守る同志関係を結んでいた伝統が長いからだと考えられる。また、複数世代同居家族が解体して核家族化が進み、相談相手が夫婦に限定されてしまったためとも考えられる。もともと別居が普通なので、別居していても親子きょうだいが相談し合う風土がある欧米と異なり、別居のために夫婦以外の関係が希薄になってしまったのである。そこで、配偶者に先立たれた高齢者、とくに男性は孤立してしまいがちになる。ここに昨年11月に発覚した京都の連続夫毒殺事件（結婚相談所を介して出会った高齢男性を殺害したとされる）の背景を見出しができる。日本社会の閉塞を打ち破って、夫婦に限定されない家族や社会の絆を取り戻す必要があろう。



ほんかわ・ゆたか

東京大学農学部農業経済学科出身。（財）国民経済研究協会常務理事を経て、アルファ社会科学（株）主席研究員。現在、幅広い分野の統計データをグラフ化して公開する「社会実情データ図録」サイトを主宰しながら、地域調査等に従事。著書に『統計データはおもしろい！』（技術評論社）、『統計データが語る日本人の大きな誤解』（日経プレミアシリーズ）など。